

# 鐘引 一名 引鐘

前

ワキ 園城寺の僧

ヲカシ 能力

ワキヅレ 從僧

シテ 里人

後

ワキ 前に同じ

シテ 龍神

地は 近江

季は 雑

ワキ詞 「是は江州園城寺の住僧にて候。さても当寺の鐘余りにちひさく候ふほどに。今日集会をなし。鐘を大きに鑄させばやと存じ候。

ヲカシ 「いかに申し上げ候。藤太秀郷の方より当寺へ御状の御座候。

ワキ 「何と秀郷のかたより御状の有ると申すか。

ヲカシ 「さん候。先々御状を御覧候へ。

ワキ 「何々畏つて申し上げ候。さても秀郷はからざるに

龍宮に頼まれ。変化の蜈蚣を平らげ候。其勲功に十種の贈物あり。中にも妙なるは一つの梵鐘なり。其こゑたへにして聞く人菩提に至るといへり。しからは此鐘を園城寺へ寄進申すべきなり。今夜かならず龍宮より来るべし。龍神に法味をなし給はゞ。あへて疑あるべからず。なんぼう不思議なる文にて候。

ワキツレ 「是は秀郷の申されごとにて候へども。先づ鐘を持

参申してこそ候へ。いまだ目に見えざる鐘をかやうに申され候ふ事。天晴秀郷の聊爾かと存じ候。

ワキ「いや／＼秀郷と申すに。五常乱れぬ名将なり。かまへて疑有るべからず。八歳の龍女は釈尊に。

地「宝珠を捧げ忽に。く。南方無垢の成等を。となへし例あり。実に有難やたのもしや。是につきてもいやましに。法の力を頼むなり。く。

シテ声「我曠劫のむかしより。末法の今に至るまで。五衰

かうかいの海にしづみ。海人の刈る藻にすむ虫の。我からぬらす袂かな。

ワキ詞「不思議やな是に出でたる者を見れば。姿は正しく人間なるが。五衰三熱の苦しみを。悲しむ声の間ゆるぞや。いかなる者ぞ名を名のれ。

シテ詞「是は此浦にすむ龍神なるが。鐘を施入の其為めに。是まであらはれ出でたるなり。

ワキ「ふしぎやさては秀郷の。

シテ「偽らざりし。

ワキ「かねことの。

地「末とほりなば今の世の。く。不思議なるべし。  
疑はで待たせ給へや。

クリ地「夫れ撞鐘といつぱ。十二因縁を表し。十二律の響  
あり。夜昼の刻限を告ぐる事。生死迷悟を示す  
とかや。

サシ「然るに此鐘は。祇園精舎の北面に掛けし鐘なり。

地「玄奘三蔵渡天の時。龍神法楽の其ために。流砂河  
に沈め給ひしを。守護して今に至るなり。去る程  
に此海の。龍神に敵をなす。鉄の蜈蚣ありしなり。  
ある時秀郷。勢田の橋を通りしに。大蛇となりて  
行きむかひ。頼む心の末とげて。神通の弓矢にて。  
忽に敵を亡ぼし。秀郷が其名は。末代に隠れよも  
あらじ。

シテ「其時龍神秀郷に。

地「数の宝を贈りしに。中にも妙なるは。此鐘の法の力による故。此寺に施入すべきなり。疑はせ給ふなど。夕べの風に声たてゝ。物さわがしき海づらに。行くかと思しが沖津浪に。立ち隠れ失せにけり。浪間にかくれ失せにけり。(中入)

ワキ詞「不思議やさては秀郷の。いつはらざりしかねこと。頼もしかりし言葉の末。其契約をたがへど。法味をなして待ち居たり。待つ程はくるしき物か

ほとゝぎす。

地「一声いそげ暁の空の。風遠近の雲むらだちて。湖の浪も動揺せり。

地「志賀辛崎の海づらに。く。立ちくる白波の。上にうかべる鐘を守護し。

後シテ「遮羯羅龍王頭はれ出づれば。

地「無数の小龍無辺の悪龍。みなことごとくうかび出でゝ。此鐘の綱手に取りつきすがりつき。引くと

ぞ見えしが。程なく寄りくるさゝ波や。三井寺の鐘楼に引き上げたり。まのあたりなる奇特かな。

シテ「遮竭羅龍王その時に。く。かの撞鐘の声を出だして。衆生の冥闇を晴らさんとて。東方に廻りて鐘をつけば。

シテ「諸行無常の響を出だし。

地「さて又南方は。

シテ「是生滅法。

地「西方に向へば。

シテ「生滅々已。

地「北方に廻れば。

シテ「寂滅為樂と。

地「つけば其声心耳をすまし。聞く人則ち菩提に至り。

仏法興隆。伽藍繁昌に守るべしと。諸龍一度に頭を傾け礼をなせば。夜もしらくと明け行く空に。龍神は眷属を引きつれく。立ち帰る波の逆まく

水に。浮き沈み。さかまく水に浮き沈んで。又  
龍宮にぞ入りにける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第二輯』大和田建樹 著